

保育者の新しいノート (7)

S. K. 生

(1)

〇いつか或る先輩に、“あなた新らしい憲法を知っていますか”、ときかかれてハツとした。初めて新聞に出たとき、讀んだには讀んだが、たゞ讀んだというだけで、それから特別に研究もしない。書き方が口語體で、前の憲法のように固苦しくは感じなかつたけれど、といつて、その意味がよく分つたのではなかつた。それで、その先輩に“いゝえ”といつたら、“いけないわ”といわれて顔が赤くなつた。

〇それから二三日たつて、またその先輩に聞かれたから、“まだ……”といつたら、これお讀みなさいといつて、憲法の講釋の本を貸して下さつた。折角貸して下さつたのだからと思つて、その晩讀んでみたら、案外よく分つて、とうとう夜ふけまで讀みつけた。そうして、なんだか、新らしい自分の國のことがはつきりしたような氣がした。なぜこうならなければならぬのだからということになるといろんな譯もあるが、この憲法をもとにして新しく生れる、新らしく再建されてゆく、わが國の姿が、なんだか明るく目に浮ぶような氣もした。

〇その話を先輩にすると、“そう、それであなたも一人前の新日本人よ”といつて笑われた。そうして、“第一、新しい憲法を知らないで、新日本の教育は出來ないわ”と眞面目にいわれた。その人は、おだやかな方だが、その言葉には力があつた。そうして、この若い私と、恥かしくなつた。

〇こないだ、再教育の講習の時、ある友達があ、//いやねえこんどの講習には憲法なんてむづかしいものがあるのよ、第一あんまもの保育と関係があるのかしら”といつてのを聞いたとき、この人よりは私の方が少し先輩だなと、ひとり得意になつた。

(2)

〇きようは大失敗。みんなで手をつないで遊戯をした時、三郎さんの服の腕が、肩のところから、すつかり破れてしまつた。みんな笑うし、三郎さんは泣き出しそうになるし、どうしようにもわたし、針も糸ももつてないんでしよう。隣の組の方に借りようと思つていつたけれど、やつぱり持つていないというの、やつと針だけでもつてた人があつたけれど糸はないという、やつと糸をもつてる人があつたけれど黒糸だという。三郎さんの服は白でしよう。黒糸じゃあ困ると思つたけれど、仕方がないから、それで假りに腕をくつつけたが、私が裁縫が下手なうえに、その肩のところかヒダになつてゐるんでしよう、その上、その針がさびてゝ通りが悪いでしよう、すつかり無細工な縫い方になつたのが、白地に黒糸だから、ごまかすことも出來ない。三郎さんは、それでも喜んで呉れたけれど、おうちへ歸つてから、先生が縫つて下さつたのと喜んで見せるのかと思うと、まだ胸がどきどきする。いつそ、破れない方の腕をほどいて歸せばよかつたかしら。それもあんまり腕のない話だし、いゝえ、じょうだんどとじやない。